

「2024 年を振り返る」

NPO 神奈川歴史教育研究会理事長 石橋 功

2024 年、「歴史総合をどう考えるか」が山川出版から、NPO 編で出版された。この本は夏の高大連携等で全国に好意的に紹介された。また東京外国語大学は、この本の合評会を企画してくださった。この出版を通じて、神奈川の若手教員の日常的な実践を全国に紹介できたのは、我々 NPO の設立の趣旨に沿うものであった。

新しい科目「歴史総合」は、従来軽視されがちであった近現代史をメインとするもので、時代の要請にあったものである。さて「歴史総合」のバックにある近現代史の歴史学研究がそのニーズに答えるものであろうか。

20 世紀前半、私の母方の祖父母は、3 人の兄弟とともにペルーに渡った。リマでそこそこ成功した祖父母は、そこで生まれた母を伴い 2 番目の弟とともに日本に帰国した。帰国後、故郷山梨で農園を購入、戦中、戦後の混乱を無事に過ごし、その人生を閉じた。21 世紀に入り、アメリカ合衆国から、ペルーに残った母の叔父の孫たちが山梨に来た。そのとき、私はペルーで食えなくなってアメリカに渡ったと勝手に思い込んでいた。ところが、後で知ったが、ペルーにいた日本人はアメリカ合衆国に強制連行され、収容所に入れられていた。その結果として叔父たちは、アメリカのロサンゼルスに住むようになったとのこと。我が配偶者の父方の祖父母は、戦前、満州に渡り商売で成功して大連で父が生まれた。1945 年早々、祖父母は、満州の、日本人支配層のすすめで日本に帰国したとのこと。第 2 次世界大戦という重要な近現代史において、私の家族周辺に起こった内容を h はたして説明できるであろうか。文献資料を残した支配階層の人々に都合の悪い歴史は、歴史の闇の中に残されてしまったようだ。

アメリカ合衆国のトランプ大統領の再選、兵庫県知事の再選、ともに今までのマスメディアの報道ではありえなかったことであった。マスメディアを含む支配層が大衆から遊離した結果であろう。

2024 年度神奈川県歴史分科会研究発表会の講師(講演内容は「近世社会と性の売買」)であった横山百合子氏は、40 歳まで神奈川県で公立高校に勤められ、その後研究者になられたとのこと。高校教員として生徒と関わった経験が、氏の研究のバックボーンになっていることをうかがわせる講演であった。氏のような下からの視線で、歴史を再構成する多くの研究者の出現が臨まれる。

神奈川県の百校計画の大量採用の教員の退職、それを埋める若手教員の採用のなかで、神奈川県の歴史教育が衰退することが懸念されたが、懸念に終わったようだ。私も NPO 理事長として 10 年近く過ぎ、そろそろ身を引く時期かと感じている。しかし今後とも、NPO 神奈川歴史教育研究会が神奈川県社会科部会歴史分科会を支え続けることを表明して筆を置きたい。

石橋元理事長と、山室帝京大学元教授の対話

はじめに

NPO 会報 10 号の石橋功理事長（当時）の原稿に対し、帝京大学元教授の山室建徳氏から感想（反論？）が送られてきました。会報 10 号に載った石橋理事長の論稿とともに、山室氏の感想を紹介させていただきます。両者を読むことで、歴史を重層的に捉えられると思います。ただし、これはあくまで石橋氏、山室氏の意見であり、歴史分科会もしくは NPO を代表する意見ではありません。（歴史分科会、NPO で、統一した意見を持っているわけではないですが、、、）

NPO 神奈川歴史教育研究会 理事長石橋功「『歴史総合をどう考えるか』山川出版から発売」

この NPO（神奈川歴史教育研究会）の最大の事業であった『歴史総合をどう考えるか』が 4 月山川出版から発売される。神奈川の歴史の若手の教師を中心に 25 人がかかわった書物がやっとできあがった。内容的に不十分な点があることは承知しているが、全国の多くの高校の歴史教育にかかわる人々に読んでいただきたい。詳しくは、作成にかかわった中山氏の論稿を、内部的な感想は児玉氏の論稿を読んでいただきたい。（NPO 会報 10 号参照）

これからの歴史教育に必要な視点を 3 つあげたい。1 つは 19 世紀型ナショナリズムを前提とした「日本史」を否定しなくてはならない。この日本史を実際のものとして信じている右翼的な存在が、日本には多数いる。「日本人種」が存在して、古代から「日本人」が日本列島に存在したというものである。人種というものは、存在しないし、弥生時代までに日本に存在したのは現在の日本人の祖先の 3 割以下である。日本列島の歴史は、地方によって異なっており、まとまった「日本史」が成立するのは、19 世紀に国民国家日本が成立して以降であろう。

同じように 19 世紀に成立したマルクス主義歴史観も否定しなければならない。ロシア革命も中国革命も多くの犠牲者を生み出したことがその根拠である。また歴史に科学的真実を探するのは極めて難しいこともその理由である。マルクス主義的歴史観のもととなった西欧中心史観も否定する必要がある。イギリスとフランスの歴史が普遍的なものではないのだから。

最後に歴史教育を身近に引き付けて授業を行うことである。私の母は、ペルーのリマで生まれた。祖父母はペルーに渡り 5 年程働き、山梨に農園を購入した。明治以降の日本は多くの移民を生み出した一例である。「鎖国」体制下の日本は、民衆はそれほど貧困でなかった（江戸時代の貧困史観は否定されつつある）。その結果、移民が発生していないことを考えると、日本の大衆は、明治以降に貧困化が進んだと考えられよう。私の義父は中国の大連生まれであった。私の子は、スペイン人と結婚して日本に住んでいる。身近な若者が、カナダやオーストラリアに移住している。1953 年（昭和 28 年）に生まれた私の世代は、外国とも外国人とも接触することは少なかった。私の世代のあり方は、江戸時代以来の珍しい世代であったようだ。

第二次世界大戦以降の高度成長し先進国であった日本は、20 世紀後半 21 世紀前半の世界の中で貧困化・少子化がすすみ、今までの日本のあり方が変わろうとしている。こうした中で、今までの「日本史」「世界史」を離れた歴史教育が求められている。「歴史総合をどう考えるか」がその手助けになることを祈っている。

NPO 会報 10 号への感想

山室建徳（帝京大学経済学部元教授）

「これからの歴史教育に必要な視点」として、いきなり「否定しなくてはならない」という命令形の文章がでてきたのに驚きました。歴史教育の場で、特定の史観を取るべきだと決めつけるのは僭越でしょう。何よりも、個々の事象への知識を増やし、それに対してできる限り柔軟な態度で接する姿勢が必要です。まして「日本には多数いる」ならば、公教育の教師が頭ごなしに、それを否定する権利はありません。

「この日本史を実際のものとして信じている右翼的な存在」といいます。私も「右翼的な存在」の一人でしょうが、「実際のものとして信じて」はいません。それは「言語化された物語」であって、「実際のもの」とは異なります。（石橋元理事長に）以前にお送りした『現代日本史』（山室氏が勤務校の授業で用いていたテキスト）の冒頭に、以下のような文章を引用しました。

「サア・ウォルター・ロレイが、或る日、窓から街の出来事を眺めてみた。暫くして他の目撃者がまるで違つて同じ出来事を報告したのを読み、書いてみた歴史の原稿を焼いて了つた。この有名な逸話も、だぼ沙魚（はぜ）をしやくつてゐる歴史家には、気違ひ染みた笑話に過ぎまいが、彼の驚

きや悲しみは全く健康であります。」(小林秀雄「歴史と文学」1941年3月)

自分にはたしかにこう見えた事件を、他人はまったく異なった解釈をし、それが記録となって残っていきます。さらに別の人間が書けば、これも違う記録になるし、後世になって読めるのは、それらの中でたまたま残ったものだけです。つまり、後世の人間が「実際のもの」である歴史にたどり着くことなどあり得ません。過去を探る手がかりは、断片的に残る主観的な認識に過ぎないからです。

しかし、「他の目撃者がまるで違つて同じ出来事を報告したのを読」み続けることを通して、歴史を振り返ることも可能ではありませんか。単に史料をたくさん集めれば歴史の真相に近づけると思い込むのでは、「だぼ沙魚をしやくつてゐる歴史家」になるだけです。そうではなくて、文章となった世界、情報化された空間を、独立した領域として見続けるというやり方です。実際に起きた出来事を直接見聞はできないが、そこに当時の人々の意識という光が投影されて、その光によって紙の上に映し出された影絵を見極めるという手法です。

どうしてそうした営みが意味を持つのかについて、「現代日本史」で細かく説明したつもりです。で、省略します。要するに、見ず知らずの他人とは異なり、家族や親友がかけがえのない存在なのは、思い出や価値観を多く共有するからです。それが、親しい付き合いの支えとなります。同じことが、日本についてもいえます。日本語、自己主張よりも相手への配慮を優先させる価値観、縄文から始まる祖先への記憶など、つまり歴史や文化を共有することで、社会としてのまとまりを保っています。どの国の社会も多かれ少なかれ同じですが、日本は同一性がとりわけ強い社会でしょう。以前は移民に寛容だった西欧社会が、最近では拒絶反応を見せるようになりました。それは、やってきた移民が自国に同化せず、独自のまとまりを保ち、西欧諸国の価値観に反する行動を公然と示すようになったからです。どう評価するかは難しいですが、基本的には拒絶反応の方が真つ当だと考えます。言葉や価値観が違うからこそ、たくさんの国家があるのです。そして、国家は、それぞれの歴史のないきさつで作られた社会を守っています。国家が他国に脅かされたり、そもそもまともな国家が無いと、人々がどんな酷い目に遭うかを、ウクライナやパレスチナが示しています。

このように日本の国家と社会は、日本の歴史や伝統文化に支えられています。それは今の世代だけではなく、数多くの世代の蓄積の上になり立っている点が大切です。これを継承することで日本人となり、その日本人が日本を支えているのです。こうした発想と対照なのが、共産主義です。ここでは、先人の知恵よりも現在の合理的な思想が重視されます。社会が直面した問題に対して、意識の高い人間や組織がその解決法を見いだせるのであり、社会を合理的に統制することでそれを実現するというのが、共産主義ひいては左翼の発想だと考えます。そして、こうした現在の人間への過信が、自己の主張を絶対化し他者との対立を激化させ、「多くの犠牲者を生み出したこと」に行き着いたのでしょう。フランス革命もその典型です。正直言って、お送りいただいた文章も断定的な姿勢が強く、そうした系譜に属するよう見えます。世の中は分からないことだらけであり、事態の「本質」を知ることができるなどと勘違いすべきではありません。

「日本人種」などという、遺伝による生物学的な区分に意味はありません。もちろん日本人といえど大雑把に黄色人種をイメージするでしょうが、中国人や韓国人も同類です。DNAなどは、文献史学とは次元の異なる話です。大切なのは、生まれた後にどんな文化の下で育ったかです。日本で生まれれば、まず縄文時代に起源を持つ日本語によって意思疎通をする訓練を受けます。そして、漢字や仮名による文章の読み書きを学びます。これを支えているのは、書き言葉のなかった古代日本が、日本語とは全く異質な書き言葉である漢字・漢語に接し、これを使いこなして日本語の読み書きができるようにしたという歴史です。漢文にレ点や一・二点をつけて読み下し文として読んだり、平仮名

や片仮名を生みだして、日本語の表記をしました。漢字をここまで使いこなした東アジア文明圏の国は、他にありません。そして、これを使った古事記・万葉集に始まる豊かな日本語文献が残されました。現在の日本語の文章は、こうした歴史に支えられています。ちなみに現存する最古の歴史文献『古事記』では、イザナギとイザナミが国生みをしますが、北海道と沖縄を除くほぼ日本全土を生んでいます。統一王朝ができた頃に、日本というまとまりが既に意識されていました。そして、日本は尾張国、伊予国、薩摩国といった国に分けられて、統治されました。先に挙げた自己主張が弱く、周りに配慮する姿勢も、異質な文明と直接ぶつかり合う経験が乏しく、長らく日本列島で日本人同士で暮らしてきた歴史からの影響が強いでしょう。

もちろん弥生文化や漢字文化は外からもたらされ、それに伴い少なからぬ人々が日本にやってきましたでしょう。秀吉の「唐入り」の際にも、多くの朝鮮人が日本に送り込まれました。しかし、彼らはその後日本に同化し、現在でも元来の言語や習慣を守っている人々はいません。近代になってやってきた朝鮮・韓国人には、まだ残っているかもしれません。しかし、今から十数年前ソウルへ行った際に、大阪からやってきた在日韓国人高校生の集団とすれ違ったことがあります。そこから聞こえたのは、ちゃきちゃきのおお弁でした。このように日本は、昔からまとまりを持っていました。かつて柳田國男「蝸牛考」で唱えられた「方言圏論」とは、京都から発した言葉が同心円状に日本全国に拡がり、それが何層にもなっているという説です。東西どちらでも遠い地域には古い時代の言葉が、近くなるにつれてより新しい言葉が残っているというのです。そして、琉球列島には日本統一以前のいちばん古い日本の言葉、日本祖語が貯えられているといえます。これについて今から約三十年前に、画期的な本が出ました。大阪はアホ、東京はバカというのが、境界線はどこかという疑問が、大阪の人気テレビ番組に寄せられ、それを制作者が調べている内に、とんでもない大発見をしました。この問題は奥が深かったため、アンケート調査の規模が次第に大きくなり、アホ・バカの他に、ハンカクサイ、ゴジャッペ、ダラ、ヌクテーなどなど多彩な表現を集録し、それらがみごとに方言圏をなしていることを実証したのです。松本修『全国アホ・バカ分布考』（新潮文庫、平成八年）です。発見していく過程が、実に生々しく描かれていて、とても面白い本です。いただいた文章は、いささか堅苦しく思えますが、この本を読んでいると、おお凄いと感嘆の声をあげたくなるほど楽しめます。ぜひぜひご一読ください。

「西遷御家人」をご存じでしょうか。承久の変で朝廷側が破れた結果、西国の所領が鎌倉幕府に没収され、東国にいた御家人が数多く西国へ移り住みます。これが西遷御家人です。当然現地では東西の価値観の衝突があったでしょうが、西遷御家人は現地に定着します。そして、彼らを祖とする戦国大名が少なからず登場しました。薩摩島津氏、豊後大友氏、日向伊東氏、肥後相良氏、備後小早川氏、安芸毛利氏などは皆そうです。承久の変をきっかけに、東西が大きくかき混ぜられたことが分ります。

たしかに東西の文化の違いは今でも残っていますが、書き言葉は共通であり、天皇が権威を持って君臨し続けたことは大きいでしょう。「まとまった『日本史』が成立するのは、19世紀に国民国家日本が成立して以降であろう」は、やはり言い過ぎです。

日本を一つのまとまりとする上で、江戸時代が大きな役割を果たしたことも見逃せません。大名はしばしば自分と地縁のない遠方の地へ所替えされ、参勤交代を一年ごとにしなければなりません。このために江戸に向かう街道が整備され、宿場町が発展します。大名は江戸に屋敷を構えなければならず、正室や嫡子はそこで生活しました。多くの家臣が江戸に住み、彼らにとって江戸はさまざまな文化や流行に接することのできる場所でした。当時の物資の輸送は船が主流でした。酒田から

津軽海峡を抜けて太平洋岸を南下して江戸に至る東廻り海運と、酒田から日本海を南下して下関から瀬戸内海を通過して大坂に至る西廻り海運が整備され、年貢米をはじめとする各地の産物が集められました。地方にある主要都市のほとんどが、近世に作られたと聞いたこともあります。こうして「まとまった『日本史』が成立」していったのです。

江戸時代に「移民が発生していないことを考えると、日本の大衆は、明治以降に貧困化が進んだ」とは、完全な間違いです。関ヶ原の戦いの頃の人口は1200万人でしたが、それから100年あまり後に3000万人強にまで急増しました。ところが、それ以降、幕末に至るまでほとんど増えていません（鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫が参考になります）。江戸前期は平和となったため、幕府や各藩の強大な力を使って、大河川の整備、用水路の設置などの大土木工事が盛んにおこなわれ、荒れ地が農地となり、農地が急増したためと考えられます。しかし、後期になると農地は増えなくなり、それに対応して人口も増えなくなりました。それは、農家にしても武家にしても長子相続で、次男三男は間引かれるか、生き延びても一生長男に仕えるしかなかったからです。それ以外に、江戸を始めとする町方に出て職人などになる手もありました。江戸は男性の数が多し独身者の町で、出生率が低く、常に農村から人手の供給を必要とする場所でした。ただし、幕末になると次第に女性の比率が上がったといえます。

明治以降、日本の人口は急増します。明治始めに3300万人程度だった人口が、約60年あまり後の昭和初年には6000万人を突破し、毎年約100万人増加しています。言うまでもなく産業革命の影響が大きかったし、そのおかげで生活水準も飛躍的に向上しています。明治始めに人口の8割位を占めていた農民とその家族は、長子相続を続けたために大きな増減はなく、主に次男三男が町や都会に出て、新しい産業の担い手になったのです。しかし、第一次産業従事者の割合が半分を切ったのは昭和10年頃で、今日に比べれば農業社会の比重は依然として大きかったです。ところが産業別の生産額を見ると、第一次産業は2割に満たず、都市と農村では貧富の差が大きな社会問題となりました。

人口急増のため、明治から移民が盛んに行われ、ハワイそしてアメリカ西海岸へ移住しましたが、人種差別意識から日系移民への反撥が盛り上がり、大正13年（1924）年事実上の日系移民排斥法が成立します。自らは文明国の一員になったという自負を持っていた日本人にとっては、人種の壁は越えがたいと思えた衝撃的な出来事でした。20世紀に入ってからブラジルへの移民も始まっていましたが、このままでは日本は行き詰まってしまうという危機感が拡がりました。そして、日露戦役の結果日本の権益下に入っていた満洲が、日本の発展すべき土地として強く意識されるようになります。満洲事変を国民が熱狂的に支持したのは、こうした期待によるものです。

注意すべきは、当時の列強は国民が新たに発展すべき土地を持っていたということです。イギリスにとっては、オーストラリアやニュージーランドやカナダや南アフリカなど、アメリカにはまだ開発が十分ではない広大な西部がありました。そして、日系人は排除されましたが、ヨーロッパ人とりわけ西欧人の移民は歓迎されました。国土を拡張しなくても、あるいは移民をしなくても、国は発展できるという認識が一般的になったのは、戦後の高度成長以降のことでしょう。今日の常識で、過去の日本を裁くなどということでは

今日交通機関の発達で、外国人との接触が当たり前になりました。そういう時代だからこそ、長い歴史をかけて形づくられた日本の一員であることを、大切にしなければならないと考えます。自分の体内には「日本」がぎっしりと詰め込められており、それなくしては生きていけません。だから、日本人として生きていける日本という場が、かけがえのないものとしてあるのです。おそらくこうした考えには異論があるでしょう。ぜひ一度議論をしたいものです。